

無双直伝英信流正統宗家 河野稔天劍百鍊先生

伝承会報

第八号 平成三十年十月十五日発行

編集発行 鈴木伸昌

今号は書籍の紹介が主です。大江正路先生、細川義昌先生の明治時代の逸話がわかるものです。それを読んで、今更ながら思うのは、武士が禄を失った時代に、生活のためには、食べることにつながる居合を続けられなかった先達が物凄くたくさんいたんだなあとということです。その中には、家禄を失う以前の段階で、居合の皆伝を貰った方が、大江先生や細川先生以外にもおられたことと推察致します。

そのような、いわば居合の受難の時代に、大江先生、細川先生が居合をお続けいただいたことの有難さが、今更ながらわかりまして、両先生への感謝の念を新たにしておる処でございます。

さて、まずは、参考としてお読みいただきたいのですが、日本映画のサイレント時代から大活躍をされた伊藤大輔という映画監督が、宇和島藩の武士であった自分の父について書いたエッセイの中に居合が出てきます。

『時代劇映画の詩と真実』（伊藤大輔著、キネマ旬報社刊より）

「父」

大酒家であったが、相手を欲せず何時間でも行儀よくキチンと端座して、黙々とひとりの酒を愛した。

あれで楽しいのだろうか子ども心にも思ったが、時として逸興禁じがたきに至ると、びょうぶを出させて半畳に立てめぐらせ、その中に坐して居合を試みた。かけ声もなく白刃一閃して音もなく瞬時に納まる。青龍・白虎・朱雀・玄武と四方に向かって剣をふるうこと四度。「酒気を払った」と称して再び杯を取るのだが、時にはびょうぶの中にすわると同時に「過ぎた！」といって剣を抜かず、それっきり杯をふせてしまうこともあった。 後略

明治期に、故郷宇和島から松山に出、さらに東京に出た旧宇和島藩士のこの居合の逸話を讀むと、こんな風に昔居合を修行しながら、明治期になり、それでも刀を手放せず、時折居合を抜いていたこの方は、まだいい方なのかもしれないという気がしております。

当流第十七代宗家 大江正路(まさじ)先生のことなど

宗家 という呼称については、(スキージャーナル社『古流居合の本道』岩田憲一著)の中にある「森繁樹が語った大江正路の居合」の項には、「大江先生から宗家のことについては何も聞いていない。中略 宗家制度はその当時は確立していなかったものではあるまいか。 中略 大阪の河野百鍊先生は英信流居合のために苦心されて、正統宗家を強調され」等の記載がある。大江先生の時代に、宗家制度が確立されていなかったとしても、いわゆる「宗家」たる立場にいた先生であることに間違いはないと思われるので、宗家と書かせていただきました。 さて、これをお読みの先生には、既にご承知の先生も多いとは思

ますが、その大江先生のご息女が書かれた本がある事を知りました。

『カナダに渡った侍の娘 ある日系一世の回想』です。大江先生のご息女はカナダに渡っていたのです。数年前見た映画「バンクーバーの朝日」が、カナダに渡った日系人社会を画いていたこともあり、カナダでのご苦労が偲ばれました。

冒頭の大江先生に関する記述が、その道統を継ぐものとしては、貴重で有難いものであった。平成十四年の発行である。この本には、英信流を学ぶ身としては興味深い記述が散見されるが、現在でもAmazon で容易に入手できるので、引用は差し控えたいと思う。

西内雅(ただし)先生のことなど

河野先生の「増補再版大日本居合道図譜」の巻頭には写真が数多く掲載されている。その中の「演武大会風景」を見ると、来賓の中に剣道範士十段の大麻勇次先生や範士九段の佐藤忠三先生のお姿も見受けられる。

全日本剣道連盟の重鎮でありながら全日本居合道連盟の大会にご来臨なされているということに、この両先生の凄さを垣間見ることが出来るのではなからうか。

さて、来賓の名前の中に、唯一小生の存じ上げないご芳名があった。それが「西内顧問」とキャプションが付されておられる方である。

「増補再版大日本居合道図譜」の一八頁下段「◎自戒(愛唱する自作座右銘)」の「五 奏刀履道可回天」であるが、これは「大日本居合道図譜」の初版本にはない。

石垣豊太郎先生が、(河野先生が「大日本居合道図譜」を増補再版す

る際に、初版本に河野先生が真筆で訂正されているもの)を資料として出版なされており、そこには「奏刀履道可回天(西内雅氏作)」とありました。この箇所、筆者は西内顧問のフルネームは西内雅なのかと推測したものの、それ以上のことはわからずじまいであった。

その後インターネットの普及もあり、検索機能を使用したところ、西内雅先生は、皇国史観で有名な平泉学派の歴史学者であり、陸軍士官学校教授を務め、終戦時には「陸軍省兵務局思想班長」であり、終戦時に発生した宮城事件では、決起を起そうとした将校と連絡をとりあっていたとされる。(『雄誌 大東亜戦争の精神と宮城事件』『大東亜戦争の結末 宮城事件資料の初公開』の二冊の共著者である岩田正孝氏とは、宮城事件の将校であり、三船敏郎が主演した映画「日本のいちばん長い日」で高橋悦史氏が演じた井田中佐のモデルである。)

西内先生は、歴史関係の著書多数に交じり、『居合道読本』(おりじん書房)という本も上梓している。ヤフーオークションで見つけたが、サブタイトルに居合各流範士校閲とあった。発行が河野先生がご逝去の翌年であったので、河野先生の校閲はなさそうということで、入手を躊躇していた。

そんな折、重信流の村上先生から、「細川義昌先生のお孫さんが書かれた『無一老人 細川義昌をめぐりて』という本が昭和五十四年に出版されたんだよ。」とお教えいただいたので、入手した。その中にことなくだりがある。

「義昌の外孫西内愛のこと 長女津留の三女、高知県立高女卒業、明治四十年一月生れである。末っ子の女子であったから特に皆から愛され、荒い声一つ聞いた事のない平和な境遇に心優しく成長した。父が再び東大法科で勉強しつつ、キリスト教の集会にも出ていた頃、義

昌の隣家で出生した。「今キリスト教の愛について研究しているのをそれを記念して愛と命名したい。」との父重忠の通信があつて愛と呼ぶことになった。少女時代、高知教会の多田牧師より受洗した。西内雅と結婚して一男一女を挙げた」

ここに出てくる西内雅は、前述の西内雅と同一人物であろうかということを無性に確認したくなつた。

すがる思いで、西内雅先生の『居合道読本』を入手した。

同一人物であつた。今では入手困難なので、少し長いが引用する。

* * *

私の郷里は土佐である。現在居合道人口の過半数を占める、英信流の宗家を代々伝えた由緒あるところで、土佐藩ではおとめ芸として、土佐の外へは伝えなかつた。(昭和二十五年になつて英信流第十九代宗家の福井春政名人が、第二十代を河野百錬名人に譲り、始めて英信流の宗家が土佐の外に出、そして英信流が日本全国へ普及する端緒にもなつた。)

私の中学生(旧制)のころ、土佐には英信流中興の宗家といわれる第十七代大江正路先生が、当時剣道界で令名のあつた剣道範士川崎善三郎先生と共に、私たちの中学校(高知県第一中学校)の剣道教師をさされていた。しかし居合道は、中学生には希望する者に、ほんの手ほどの程度しか教えてもらえなかつた。

たまたま、私の従兄の西内熊意という海軍士官が、居合道に志を持っていて、休暇で帰省すると、大江先生の教えを受けに行くので、くつついて行って、ものまね程度のことをしたものだ。刀法のことよりも、従兄の海軍士官や、当時弁護士をしていた父が、居合道の精神的な面をほめるので、信仰的にまで魅力を感じて育つた。

大学を卒業して間もなく、ふとした縁で先妻(戦争犠牲で病没)の祖父が、英信流別伝の宗家の細川義昌先生であつた。細川義昌先生は、片岡健吉先生(初代衆議院議長)と共に、土佐から選出された初代の代議士で、その風格の高いことで令名があつた。その居合道の弟子に、中山博道先生がいたと伝えられる。

私が結婚した当時、細川義昌先生は他界されていた。その存命中に、私の先妻に“この子が男であつたならばなあ”と言いつつ、きびしいしつけをしたこともあつたと聞いた。そのためか、先妻は武士の心構えをどこもなく持っていた。そうした縁で、先妻の祖母は、私に、“細川家では居合道を継ぐものがないので、お前さんやつとせとも言つて、蔵にしまつてある居合道の伝書を見せても下された。

これが縁で、英信流第十九代の福井春政先生は、私を非常にかわいがりもし、丁寧にも扱つて下された。そして、福井先生は、外では、“おれの秘蔵弟子に西内という者がいて、いまかくかくの仕事をしてゐる”というのを自慢話にされていたようである。やはり真正正銘、免許皆伝の弟子として、私に口伝され、書翰で教え、証書まで下された。その証書の用紙が、気に入つたものがないとて、何個月も探してやつと土佐紙の本場のものをみつけれられ、それに自ら書きになられた。失礼だが、恐らく何枚も書き損じられたことであろう。

* * *

福井春政先生の師匠である大江正路先生は、谷村派の五藤孫兵衛正亮先生につかれる前に、下村派の下村茂市先生に師事している。細川義昌先生も下村先生につかれていたので、その意味では福井春政先生も下村先生の孫弟子と表現することもできる。

いずれにしても、福井春政先生が、細川義昌先生の系譜につらな

る西内先生をかわいがり、丁寧に扱ったという証言が重要である。

「下村派の細川先生の縁に連なるのでは、教えられん」などと言っていないのだ。下村派であろうと、同じ英信流の縁につながっているのであれば、かわいがるという、そういう発想だったのではなからうか。

転じて現代はどうであろうか。連盟の違い等、当時より関係は複雑化してはいるが、正直申せば、現在の英信流居合人は、はっきりとはいわないものの、谷村派と下村派が、お互いに「本物はこっち」とばかり、殆ど交流していない。

河野先生がどの程度、下村派あるいは重信流を研究されたかはわからない。しかしながら、「無双直伝英信流居合道」の出版に際し、中山先生から序文を頂いているし、「大日本居合道図譜」には中山先生やその高弟の橋本統陽先生のお写真も掲載しておられるし、河野家のアルバムには、橋本統洋先生とのスナップショットが散見されるところを見ると、形ばかりの付き合い以上の交誼があったのではないかと推測される。

我々河野百錬伝承会は、その河野先生の真似をして、重信流や下村派の諸先生方も、また、連盟を異とする直伝の諸先生方も、交流し、その中で、色々吸収させて頂きたいと念じる次第である。

他連盟、他道場との交流に縛りをかけている連盟もあるやに聞き及んでおりますが、口外は致しませんし、ホームページにも載せませんので、今後当会が突如、これをお読みの道場の門を叩くかもしれませんが、よろしくお願い申し上げます。

